きんもくせい

平成24年　学校教育だより
December 12 第315号
（年４回発行）
編集・きんもくせい編集委員会
発行・埼玉県富士見市教育委員会
電話・049-251-2711（内線622）

編集目標　人間尊重の教育を求めて

台中クリーン大作戦「地域を美しく！」　写真提供／富士見台中学校

「冬の空」

本郷中学校　二年
遠　藤　奈菜佳

夜、ベランダに出た
電燈が
赤や黄色の葉を照らしている
月の光が
空や雲を輝かせている
外はこんなに寒いのに
明りはこんなにも温かい
明日もまた
一日がはじまる

自ら安全に「生きる力」を育てる

児童生徒の安全を守るために、学校の役割は大きく二つあります。一つは、学校の環境を安全に保つ「安全管理」、もう一つは、児童生徒が自ら安全に生きる力を育てる「安全教育」です。特に後者は、放課後や休日、また卒業後など、学校を離れて大人のサポートがない場面でも自ら安全な行動をとれるようにするために非常に大切です。

安全教育は、学校の教育活動全体を通じて行われるものですが、その核となるものは授業、「学級活動」による安全指導です。書く力や計算する力が国語や算数の授業を通して身につくのと同様に、安全に生きる力は安全の授業によって身につきます。

今回は、本校で実践した安全教育の授業（学級活動による防災指導）を紹介いたします。

くむ安全教育

習を通して　～

指導者　関沢小学校教諭　**渡辺　中**

もしも学級で地震が起きたら ～家庭科室での危険～

東日本大震災から一年半が経過し、比較的被害の少なかった埼玉では、ほぼ日常を取り戻したように感じている人が多いのではないでしょうか。しかし、それとともに災害に対する危機感までも失われていくことは非常に危険です。

災害はいつ、どのような状況でやってくるか分かりません。児童生徒には、万が一大人がいなくても「自ら危険を予測し、安全な行動をとれる能力」を身につけさせる必要があると考え、今回の授業を計画しました。

本校の三学年以上の児童は震災発生時に学校にいて、長く激しい揺れの記憶もしっかりと残っています。年三回の避難訓練では、多くの児童が私語をせず真剣に取り組む姿が見られます。昨年度から始めた「緊急地震速報を活用した避難訓練（チャイム音を放送し、教師の指示なしでも机の下にもぐる）」も児童の間に定着してきました。

授業の前のアンケートによると、「教室で地震が来た場合」の対処法について、ほとんどの児童が「机の下にもぐる」「頭を守る」などの基本行動を理解しています。しかし、廊下など「教室以外」での危険回避行動では回答に困る児童も見られました。教室での危険回避の行動を、想定に応じて臨機応変に対応させる力が必要です。

授業では、「危険予測トレーニング」の手法を用いて、家庭科室における危険予測を行ないました。児童が発見した危険を基に、適切に危険を回避する行動（安全行動）を導き出し、それが正しいかを検証していく方法です。

指導の重点として、基本行動の「頭部保護」に加えて、危険回避のキーワード「(物が)落ちてこない・倒れてこない・動いてこない」場所に身を寄せることを確実におさえました。また、比較的頻度の少ない地震災害では、日常的な

子どもの四季

針ケ谷小学校　6年
田中　香穂

みんなで協力した緑化活動

１０月と１１月のはじめに、ＰＴＡのお母さんたちといっしょにやよいの広場や正門のところに花の苗を植える活動をしました。植えた花は、パンジー、ノースポール、ビオラ、ストック、葉ボタンの５種類です。みんなで協力して植えたので学校がとてもきれいになりました。今は緑化委員会のみんなで曜日を決めて水やりをしています。これからも、緑化委員会の委員長として、学校に緑を増やしたいです。そして野菜も育てて楽しい学校にしていきたいです。

わかる授業　＝ 安全教育 ＝

生きる力をはぐ ～ 危険予測学

行動目標が立てにくいという問題点があります。そこで、「身の周りの落ちてきそうな物を減らす」「普段から放送をよく聞く」などの、日常すぐに生かせる「めあて」が立てられるように支援をしました。

授業の実際・成果と課題

授業では、まず、想定と同じように実際の家庭科室で行いました。最初に、「緊急地震速報」のチャイム音を鳴らしてショート訓練を行いました。児童は、すぐに机の下にもぐろうとします。しかし、家庭科室の机は下にもぐれないタイプのため身を隠すことができずあわてます。児童に、教室以外の場所での臨機応変な対応の必要性を感じさせることができたと思います。

次に、今日の学習課題「家庭科室で地震が起きたら」を示し、ワークシートを用いて家庭科室での危険予測をさせました。児童は、自分の見つけた危険箇所にレッドカードを持って立ちます。「火災が起きる」「食器棚の皿が飛び出す」等、家庭科室ならではの危険を見つけることができました。

その後、危険を回避する安全な避難行動を考え、さらに本当にそれが正しいかどうか再度ショート訓練を行い、検証しました。

資料　危険予測トレーニングを取り入れた学習法（5段階）

導入	①問題把握	問題を自分のこととして意識する。
展開	②場面分析	提示された問題場面について危険を予測する。
	③仮説設定	どうすれば危険を回避し、安全に過ごせるかを考える。
	④検　証	自分の考えた安全行動の適性を確かめる。
まとめ	⑤適　用	行動目標を設定し、意欲を高める。

最後に、今日の学習のまとめを行い、これから自分はどのように生活するのか「めあて」を立てさせました。児童は、「日頃から危険な場所を探す」「家で避難訓練をやる」「もしもの時の避難場所を家庭で決めておく」など、すぐに日常生活で生かすことのできる「めあて」を自己決定することができました。

今後の課題として、危険予測・危険回避の能力の育成に加えて「安全に行動する態度」を育てることが重要であると考えます。安全な行動をとろうとする態度は、「自尊感情」や「自己肯定感」に左右される面が大きいと言われます。周りの人々からサポートされていると感じる子どもは、かけがえのない自分という自己肯定感を実感することで精神的に安定し、主体的に危険を回避しようとする態度が生まれていくのです。学校・保護者・地域社会が一体となり、大人の温かいサポートで、子どもたちの「安全に生きる力」をはぐくんでいく、そんな理想の安全教育を実現できるよう、研修に努め、実践を広げていきたいと思います。

指導・講評

関沢小学校校長　福満 浩一

防災教育の根幹は、生命尊重と防災能力の育成である。本実践は、緊急地震速報を活用したショート訓練から入り、危険予測トレーニングの手法も取り入れて防災能力の育成を図っている。授業のポイントは、地震発生時の危険を予測すること（危険予測）、自分の身を自分で守る行動をとること（危険回避）の二点である。また、単なる知識の理解ではなく、児童が認知した情報に基づいて的確に判断する力を培う視点も大切である。

特別支援教育

一人ひとりに寄り添うために

南畑小学校教諭　森尾 綾

四十人の児童がいれば四十通りの個性があり、「困り感」もあり、四十通りの支援が必要となってきます。

一日の予定が気になって仕方がない子、予定の変更を苦痛に感じる子、時間割と違っていると「なぜですか？」と不安そうに何度も聞きにくる子、「今日は何をするのですか？時間割通りですか？」と毎朝のように確認にくる子、いろいろな子がいます。日課・持ち物など急に変更することが児童にとって不安であり、大きな苦痛と感じる子もいる事に気づかされました。そして始めたのが「一日の予定ボード」です。朝の会で一日の予定を確認し、記入しておくという簡単な物です。ボードを設置しておくことで、一人ひとりが毎朝そのボードを見て気づけば、担任に聞きにくることもなくなっていきました。

また、このボードは、一人の子だけでなく他の子どもたちにとっても見通しをもって生活でき、便利な物となっていきました。自主的に行動するのに役立ち、一日の学校生活も計画的になり、一人の「困り感」の解決が学級全体につながった瞬間でした。

困っている子を助けることは、他の子にとってもマイナスにはなりません。そして、一人ひとり「困り感」を把握し、支援していくことが温かいクラスを作る第一歩だと考えます。

はぐくむ
～学校・家庭・地域から～

「ふじみ親児会」に参加して

富士見特別支援学校保護者　武末　拓大

我が家には、六歳と八歳の娘がいます。二人とも先天性脳性マヒで生まれました。

次女のサヤカはみずほ学園へ、長女のミチカは富士見特別支援学校にそれぞれ元気に通っています。重度の障がいがあるにもかかわらず、通える施設が市内にあることでとても助かっています。

ミチカが小学部に入った当初、私は子どもとどう関わっていけば良いのか？何をすれば子どものためになるのか？と一人悩んだ時期がありました。

そんな時、『ふじみ親児会（オヤジカイ）』へ参加するようになったのです。

当時、PTA会長さんが「学校行事をサポートする会を作りたいのだけれど一緒にやらない」と誘って頂いたのがきっかけでした。

親児会の活動を通じて、多くの先生や保護者の方々と顔見知りになり、娘の学校生活を身近に感じることができるようになりました。

また、親児会仲間とは子育てについて熱く語り合うこともあり、それまでの「何も行動できず一人思い悩む」といったことはずいぶんと減りました。

今は学校行事へ参加することが楽しみで、少なからず『子育て』にかかわっていることを実感することができます。

子どもがせっかく与えてくれた環境ですから、これからも多くの方々と触れ合いながら、親子で楽しんで行きたいと思います。

言語活動の充実

勝瀬中学校

■取組の概要とねらい

中学校学習指導要領では、「生きる力」の育成が継承され、外国語科では「コミュニケーション能力の基礎を養う」ことにある。言語活動を通して生徒の「表現の能力」を高めるために、

・初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すこと

・英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くこと

の二点に重点を置いて、授業を計画し、実践している。

■具体的な実践内容

一年生では、小学校と連携を図りコミュニケーション活動を、二・三年生では、既習事項が反映できる言語活動に取り組んでいる。

①インプットの作成と授業での活用、評価

②T・T等のオーラルな導入

③スピーチの実施と評価

■成果と今後の課題

成果として、生徒が主体的に英語を使って表現しようとする態度が多く見られた。今後はアンケート調査等を実施し、計画や活動自体に修正等を加えていきたい。

この環境が長く続くことを願って

水谷小学校保護者　平井　花織

我が家には、小学校三年生になる男の子がいます。兄弟はいません。一人っ子ですが、近所には小学校三年生を筆頭に赤ちゃんまで十二人の子どもが住んでいます。おかげさまで、夏休みなどの長期間のお休みも遊び相手に困る事なく過ごしています。

息子は、学校から帰るとランドセルを置き、私と話をするのもそこそこに友達と家の前で遊び始めます。最近は公園などでゲーム機で遊ぶ子どもたちの姿を見かけます。ところが、我が家の周りでは、ほぼ毎日、道路にチョークで絵を描いて電車ごっこ、長なわとび、ドロ遊びなどで、小学生から小さな子まで一緒に遊んでいます。夏休みには、近所の人達が集まり花火大会をして楽しみます。ゲーム機などなかった私達の子どものころ、まるで昭和時代のような光景です。一人っ子の息子

にとって最高の環境です。

電車や高速道路の好きな息子は、友達と毎日、電車の時刻表を見たり、地図を見たりしながら、道路に絵を描いているうちにいつの間にか、日本の都道府県の形と名前を覚えてしまいました。友達とのかかわりや遊びを通して、たくさんのことを教わっているようです。今では、見かける事が少なくなってきた姿ですが、とても大切な事ではないかと思います。富士見市は、畑や自然も多く、地域の方々が子ども達を見守ってくださり、とても子育てのしやすい所です。この環境が長く続くことを願っております。

感謝の心をはぐくむ

ふじみ野小学校

本校では、「子ども達の豊かな心を育む」ことを目標の一つとして、教育活動に取り組んでいます。そして、人の気持ちを理解し、人と共に活動し、感謝する心を持つことが豊かな心の育成につながると考えています。

本校では、日頃から多くの方に様々な支援や協力をいただいています。その支援に対して、感謝の気持ちを伝える場として、十一月に『感謝のつどい』を行っています。

事前に児童会の集会委員が中心となり、お世話になっている方々にインタビューをし、その仕事内容や思いなどを新聞にまとめ、全校に知らせます。また、全校の児童、一人一人が感謝の気持ちを込めて手紙を書くことで感謝の心を育てます。この手紙は、当日お渡しします。

この感謝のつどいを通して児童一人一人がたくさんの人によって支えられていることに気づき、感謝の心を育んでほしいと願っています。

教育課題特集

生きる力を

良い本との出会いを

富士見市中央図書館業務責任者　宮地　秀美

小学校の図書館司書をしていた時のことです。とてもヤンチャなA君が、五年の図書委員になりました。委員会の仕事には一回も来たことがなかったのですが、秋の読書週間の前に図書室にやってきて絵本を捜していると言うのです。「髪を短く切られておでこが広い女の子の話」と聞いて、私は「でこちゃん」(つちだのぶこ作)の絵本を見せました。彼は「よくわかったね。すごい!!」と大喜び、この絵本を読書週間中に行う低学年への読み聞かせで読むために図書委員になったと言うのです。「そう言えばA君でこちゃんに似ていない?」と私は思わず言ってしまったのですが、彼は二年の時、読み聞かせをしてもらって自分でも「オレの本だ」と思ってずっと捜していたとか。「これからは題名を忘れずにずっと大切な一冊にしてね。」と話をしました。

学校図書館や公共図書館で働いてきて常に思っていることは、「子ども達にたくさんの良い本に触れて、大切な一冊と出会ってほしい。」と言うことです。朝読書や図書の時間が設定されている学校が増えて、貸出冊数も増えていると聞きますが、量だけでなく本に触れ、質を高め「読む力」を身につけてほしいです。そして本の世界でいっぱい楽しんでほしいと思います。

これからも図書館からたくさんの情報や機会を発信していきたいと思います。また大人が良い本のある環境を作ってほしいと願っています。

人間尊重教育推進

わたしたちのまちに　育てよう　広げよう　人間尊重の心

一　富士見市は人間尊重宣言都市です

私たちのまち富士見市は、昭和四十一年に人間尊重都市宣言をしました。

「からだと心の健康を高めよう」

「自分を大切にするとともに、他人を尊重しよう」

「個性をよりよく生かし社会のために役立てよう」

と呼びかけながら私たちのまちを人間尊重のまちにすることを宣言したのです。

二　学校における人間尊重

市内の小・中・特別支援学校では、一人ひとりの子どもたちに確かな学力を身につけさせるとともに、人間らしくよりよく生きる心をはぐくむための教育が実践されています。

また、すべての教職員により一人ひとりの子どもたちが大切にされ、互いに尊重し合い、信頼関係で結ばれた学校づくりが進められています。

三　家庭教育における人間尊重

子どもにとって家庭は、安らぎの場所であり、人間としての生き方を学ぶかけがえのない場です。また、親子のコミュニケーションは、食事が体をつくるのと同じように、子どもの豊かな心をはぐくむこととなります。家庭での温かい言葉かけは、子どもの心を育てる栄養となります。

毎日の家庭生活の中で、やさしさや思いやりなどの豊かな心が育つことを願って「家庭における人間尊重教育十か条」が作成されておりますのでご活用ください。

家庭、学校・行政が力を合わせ、一体となって子どもたちの健全な育成に努力していきましょう。

針ケ谷小（児童会が取り組むあいさつ運動）

鶴瀬小（挨拶は「いい気持ちで自分から」）

家庭における人間尊重教育十か条

一　人のいのちを大切にし
　いのちある動物、植物をいたわりましょう

二　健康を大切にし　正しい食事と適度な運動で
　からだづくりにつとめましょう

三　おはよう、おやすみ、ただいま、おかえりの
　ことばが聞こえる温かい家庭をつくりましょう

四　ありがとう、ごくろうさまの素直なことばで
　感謝の心を育てましょう

五　家族の仕事を分担し
　家族の一員としての役割をはたしましょう

六　人の喜びを喜びとし　人の心の痛みを
　分かちあい助けあっていきましょう

七　やさしさ　いたわりの心を大切にし
　おとしよりの方々に学びましょう

八　どんな物も人の汗と力でできることを知り
　物を大切にする心を育てましょう

九　正しくやさしいことばでつつまれた
　明るい家庭をつくりましょう

十　正しいことをつらぬく強い心で
　勇気ある行動をとりましょう

人間尊重　わたしたちの合言葉

その気持ち　心の中に　ためないで
（つるせ台小学校　五年　西尾　春陽）

飛び越えろ　差別という名の　そのかべを
（東中学校　一年　神戸　周馬）

やさしさは　心をつなぐ　合言葉
（水谷東小学校　五年　徳嵩　里沙）

悪口は　見えないいじめ　やめようよ
（勝瀬小学校　五年　舘野　香音）

せめないで　仲間の失敗　はげまそう
（ふじみ野小学校　五年　筒場　優樹）

その言葉　友を助ける　命づな
（西中学校　一年　田口　廉）

口に出し　伝えることで　さす光
（勝瀬中学校　一年　菅　里佳子）

〈入間郡市同和対策協議会
入間地区人権教育推進協議会　応募標語より
富士見市人権教育推進協議会〉

本郷中（３年生の保育実習の様子）

水谷小（４年生の手話学習）

人間尊重・私の主張

人権問題について

勇気

富士見台中学校　三年
酒見　桃夏

このお話は、私が中学二年生の夏の時のお話です。

私はその日、友達と勉強した後にみんなでお風呂屋さんに行き、自転車に乗って鶴瀬駅の近くを話をしながら帰っている時でした。前に白い杖を持って歩いている男の人がいました。その男の人は誰が見ても分かるくらいに自分の行きたい方向に行けず、ぐるぐるとさまよい、駐車場の方に歩いているところでした。私達はみんなで止まって少しの間見ていましたが、通り過ぎていく大人たちは見て見ぬふりをしてそのままどこかへ行ってしまう人ばかりでした。

私達はその男の人を見かける数日前に目の見えない人にどう接すればいいかなどの勉強を学校でやっていたのでみんなで自転車を止め、勇気を出して話しかけました。その人は思っていたとおり、道に迷っていて困っていたそうです。

それから行きたい場所を聞き、学校で教えてもらった通りに腕を貸して一緒に歩きました。

その男の人は、「もうここからは一人で行ける。ここまで連れて来てくれてありがとう。」と言って帰って行きました。私は「ありがとう。」と言われた時、すごくうれしくなってしばらくその場所に立ってその男の人の姿が見えなくなるまでそこにいました。その後、自転車を置いておいた場所に戻りみんなで帰りました。

その日の夜は寝るまで、「なぜ、大人の人たちは目の不自由な人が目の前にいて困っているのに助けてあげないのか」と考えていました。周りの人は早く帰りたかったから、自分以外の人のことがどうでもいい、私はそういう考え方は間違っていると思います。もし自分が目が不自由な人と考えれば困っているときに目の前が真っ暗で、頼りになるのが白い杖しかないという状況になったらどうしていいかも分からず声を掛けてくれるのを待つしかないと考えると思います。でも、声を掛けてくれる人がいなかったらと考えると家に着くのがとても遅くなりとても大変なのだと思います。

人見知りの私でも勇気を持って話しかけることができました。困っている人を見たら優しく声を掛けてあげる、勇気を出してみる、思いやりがあれば誰でも人を助けることができると思います。

私のクラスには、「ハッピー十箇条」というものがあります。私たちがよりよく楽しめるためによりよく暮らしやすい生活などにするために決めたものです。その中に「自己中心的な考えではなく、人のことも考えて行動しよう。」という目標があります。その目標を達成するためにみんな、自分だけのことを考えるのではなくそれぞれ一人ひとりが思いやりを持って困っている友達などがいたら助け合ってみんながみんなを支えながら楽しくハッピーに学校生活が送れるように協力して楽しく過ごしています。ですが、世界中の人たち全員が助け合ってたくさん笑ってみんなが平等に生きていくことはすごく難しいことかもしれないけれど、一人ひとりができることから少しずつやっていけばいい社会になっていくのだろうと思いました。

これからも私ができることからやっていきたいなと思いました。

教育委員会だより

◆高等学校･大学等への入学に係る利子補給制度のご案内

この制度は、高校、専修学校、専門学校、短期大学及び大学への入学予定者の保護者で、日本政策金融公庫の教育一般貸付（入学資金）を受けている方に対し、その返済利子の一部又は全部を助成し、経済的負担の軽減を図るものです。

◇利子補給額

利子補給の対象額は、融資を受けた額の内７０万円を限度とします。利子補給額は、融資を受けた利率で、元利均等月賦償還、据置期間なしで計算します。

◇利子補給期間

５年を限度とします。

◇申請手続き及び問合せ

教育委員会教育政策課まで（富士見市立中央図書館２階）
ＴＥＬ　０４９－２５１－２７１１（内線６１２）

※教育一般貸付に関する問合せは下記へ

日本政策金融公庫　川越支店
〒３５０-１１２３
川越市脇田本町１４番１（日本生命ビル５階）
ＴＥＬ（お申込み相談）０４９-２４６-４１７１

書きぞめ展のお知らせ

《市内展》　日時：1月30日(水)17:00～21:00
31日(木)　9:00～21:00
2月　1日(金)　9:00～14:00
場所：富士見市総合体育館サブアリーナ

《中央展》　日時：1月26日(土)9:00～16:00
27日(日)9:00～16:00
場所：　深谷市立深谷小学校

クラスの横顔

仲間と一緒に

鶴瀬小学校教諭　瀬川　英二

思わず、後ろにいるクラスの子どもたちの方を振り返りました。「翼をください」の全体合唱で始まった市内音楽会。その歌声に背中を押されてしまいそうでした。それほど、素晴しいエネルギーを感じました。

四年生も半ばを折り返し、あっという間に後半へとかけ足です。その速い歩みの中でも、全力を出すこと、相手とつながることを大切にして、根を大きく広げてきました。ふだんの子どもたちの努力がこの歌声に表れたでしょう。

教室で、ふとシーンとする時間があります。さっきまでは、あんなにわいわいとしていたのに。誰もが真剣な表情でノートに書き込んでいます。

「がんばれー。」「大丈夫だよ。」友達を励まし、自然に拍手も起こります。

「うんうん。」話そうとするクラスの仲間に、「目と耳と心を向けて聴いているよ。」と伝えます。

クラスの仲間と出会えた奇跡。宇宙から地球に落ちてきた隕石が、さらに自分の家のトイレに飛び込んできます。「チャポン！」子どもたちは笑います。その表情がとてもうれしそうです。「そんな奇跡の仲間と一緒に成長しようね。」クラス全員の思いになってきたように感じます。

これからも、学校生活の「当たり前のレベル」を上げ続けて行こうと思います。子どもも私も、校庭の大イチョウのような大きな樹に成長していきたいと思います。

編集日記

生涯学習課主催「地域子ども教室」の研修会に参加した。前半は、埼玉大学講師森本扶先生の「子どもたちの今」～現代の子どもの実態と居場所づくり～をテーマに、基調報告があった。特に小学生の子ども達にとっての安心・安全の昔と今の違いや、今日的な居場所づくりについて提案があった。後半は、地域子ども教室の運営委員の方々から、「今の子ども達の課題は教育にあるのではないか。」「安心安全でない社会だから、大人が見守る必要があるのではないか。」等々、現状や課題、日頃の「子ども教室」の活動の御苦労など貴重なお話を伺うことができた。森本先生の「居場所づくりの三つのポイント」に、①愛され信頼されているか、②子どもが主体的になれるか、③将来の大人像や社会への参画が持てるか、が大事であるということであった。子ども同士が信頼をはぐくむ「居場所」について、三つのポイントをもとに、大人や地域がどのように支えていくのか、次号でも考えてみたいと思う。各小学校での「子ども教室」は、地域のボランティアの方にお世話になっている。どんな子どもを育てていくのか、今後の地域づくりにも影響してくる。

次号につづく

（忽滑谷）